

よる口腔癌発症機序に深く関与する可能性が示唆された。

演題2. 破骨細胞における calpain による細胞骨格制御機構について

○鍵谷 忠慶, 藤原 尚樹, 石関 清人,
原田 英光

岩手医科大学歯学部口腔機能構造学講座
口腔組織学分野

目的:我々はこれまで, μ および m-calpain が破骨細胞のアポトーシスの際に発現上昇していることを報告した. 特に, m-calpain は破骨細胞の特異的細胞骨格である actin ring 周囲に局在していることから, 細胞骨格制御に中心的役割を果たしていると考え, calpain の役割を解明することを目的とした.

材料・方法:6週齢 ddY マウスより骨髓細胞を採取し, M-CSF と RANKL によって成熟破骨細胞を形成させた. その後, calpain 阻害剤 (calpeptin, calpastatin peptide) とヒトカルシトニンを作用させて, 蛍光染色法により actin ring の形態を, リアルタイム PCR 法により calpain や細胞骨格関連遺伝子の発現を調べた. また, マウスマクロファージ細胞株 RAW264.7 へ μ および m-calpain の siRNA を各2種類トランスフェクションし, RANKL によって破骨細胞様細胞を形成させて, actin ring の形態を観察した.

結果:calpain 阻害剤と m-calpain siRNA によって actin ring は崩壊を示したが, μ -calpain siRNA では崩壊しなかった. また, カルシトニンによって, actin ring は崩壊し, μ および m-calpain の発現は減少した. この時, 細胞骨格関連遺伝子の slingshot 3 の発現が有意に上昇した.

考察:以上よりカルシトニンは, m-calpain を介して slingshot 3 を活性化し, actin を脱重合することで actin ring を崩壊させる可能性が示唆された.

演題3. 顎関節滑膜軟骨腫症の病理学的検討

○三上 俊成, 青村 知幸*, 熊谷 章子**,
大平 明範**, 水城 春美*, 杉山 芳樹**, 武田 泰典

岩手医科大学歯学部口腔病因病態制御学講座 口腔病理学分野, 同口腔外科学講座 顎口腔外科学分野*, 同歯科口腔外科学分野**

目的:顎関節に生じた結晶性関節炎や滑膜軟骨腫症では, 初期には疼痛のみを主症状とするために顎関節症と診断されることが少なくない. 実際に, 我々が結晶性関節炎あるいは滑膜軟骨腫症と診断した4例全てにおいて, 前医で顎関節症として治療が施されていた. なかには3年以上も同治療がなされていた例もあった. 結果的には1例を除く3例で周囲組織を含む外科的切除が行われた. 早期に確定診断がされていれば侵襲の大きな外科的処置は免れていた可能性がある. そこで本研究の目的は, 顎関節に生じた滑膜軟骨腫症を中心に病態について解析を行い, 発症メカニズムについて検討を行うことである.

方法:顎関節に生じた滑膜軟骨腫症の3症例について, 生検および手術にて切除した組織片を用い, 特殊染色により形態学的観察を行った. 結果:3症例のうち2症例では数十個におよぶ米粒大の軟骨様組織が手術により摘出され, 病理組織学的観察では摘出物が軟骨塊で, 軟骨の一部には軟骨基質に混じて骨化している部位も観察されたことから, 比較的成熟した軟骨組織であることが分かった. また, 1例は顎関節洗浄時に採取されたもので, 微細な白色組織であった. 病理組織学的観察では軟骨基質が確認されたが成熟度は低く, 骨化も見られなかった. 考察:滑膜軟骨腫症の発症機序に関して, 今回我々が行った3症例の比較により, 軟骨組織が未だ微細で幼弱な段階で滑膜から上関節腔に放出し, 関節腔内でそれぞれが成熟し, 米粒大へとなる機序が示唆された. また, 顎関節症患者の関節洗浄液から軟骨塊が採取されたことにより, 顎関節症患者にはこのような初期の滑膜軟骨腫症, あるいは結晶性関節炎の症例も含まれているかもしれない.

結論：軟骨組織が微細で幼弱な段階で滑膜から上関節腔に放出し、関節腔内でそれぞれが成熟し、米粒大へとなる機序が示唆された。

演題4. 平成20年度岩手県国民健康保険診療施設歯科診療所研修の研修歯科医と受入れ施設に対するアンケート調査

○工藤 義之, 岸 光男, 熊谷 啓二,
千田弥栄子, 柳谷 隆仁, 岡田 伸男,
星野 正行, 古川 良俊, 浅野 明子,
三浦 廣行

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
総合歯科教育学分野

目的：歯科訪問診療、歯科保健活動を含む地域医療およびへき地における歯科医療を研修歯科医が経験することを目的に、平成18年度から岩手医科大学附属病院歯科医師臨床研修プログラムでは岩手県内の国民健康保険診療施設歯科診療所において3日間の研修を3年間実施した。平成18年度研修終了後に受入れ施設を対象としたアンケート調査を実施し研修の改善を図った。本研究の目的は改善後の研修の評価、分析と改善点を抽出することである。

対象と方法：平成20年度本研修に参加した研修歯科医33名と研修を受入れた9施設の両者を対象としたアンケート調査を実施した。

結果と考察：回収率は研修歯科医85%、受入れ施設100%であった。本研修を通じて79%の研修歯科医が歯科訪問診療、歯科保健活動を含むへき地における地域医療歯科医療を経験することができた。研修日程によっては歯科訪問診療、歯科保健活動を経験できなかったため受入れ施設の予定を把握した上で研修日程を策定する必要があると考えられた。本研修に懸かる宿泊で研修歯科医の費用負担に差があったことから早急に是正する必要があると考えられた。研修歯科医が本研修を経験することについて93%の研修歯科医が有用であると考え、すべての受入れ施設が有意義であると考えていた。本研修を通じて研修歯科医が経験したことは、本院や協力型施設では経験することが困難であることから、本研修を継続する意義があると考えられた。

結論：本研修は本院歯科医師臨床研修プログラムの目標達成に必要な研修である。

演題5. 歯科医師卒後臨床研修初期における医療面接研修の意義

○千田弥栄子, 岸 光男, 熊谷 啓二,
柳谷 隆仁, 浅野 明子, 坂本 望,
星野 正行, 瀬川 清, 工藤 義之,
三浦 廣行

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
総合歯科教育学分野

目的：現在、岩手医科大学歯科医師臨床研修プログラムでは研修初期に、専門の教育を受けた模擬患者(SP)と対峙する医療面接研修を実施している。我々は、研修評価の分析と研修歯科医に対するアンケート調査を行い、本研修の意義を検討した。

方法：平成21年度に医療面接研修を行った臨床研修歯科医30名を対象とした。研修では、A「歯周治療と義歯作製過程の説明」、B「麻酔抜髄法の説明」、C「入院の必要性の説明」の3課題を行った。研修歯科医の医療面接はSPと指導歯科医が同じ項目について評価した。研修後に15項目のアンケート調査を実施し、結果の主成分分析後、抽出された成分得点の課題別平均値を一元配置分散分析に供した。

結果：抽出された3つの主成分で全固有値の66.8%が説明された。成分1は「専門のSPに面接したことの意義」に関する成分と推測された。また成分1の因子得点平均値に課題間で差が認められ、C課題を実施した者で有意に高かった。成分2は「研修内容への理解」、成分3は「研修プログラムとしての医療面接研修への評価」を表す成分と考えられた。また、課題CにおいてSPは研修歯科医の面接を他の課題よりも低く評価していたのに対し、指導歯科医の評価は高かった。

考察：高難度の課題において専門的SPと面接した場合に、研修歯科医は本研修に意義を感じているものと考えられた。課題CでSPと指導歯科医の評価に差が生じたことは、指導歯科医が課題の難易度を考慮したことによると思われる。困難な課題に対してもある程度の水準を求